

# 青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る

上間 篤

## 要旨

近年今帰仁城跡の郭内から、統一王朝以前にこの城を本拠とした勢力の出自に関係すると見られる品々が出土している。かかる出土物の中で生活、宗教、軍装備、娯楽、装身具などに関わる品目は、一様に元朝に仕えて江南地方で活躍した西域出自の色目人との関わりを示唆する特徴に彩られている。関係する出土物の一つに異色の十字紋をあしらった青花と呼ばれる元朝期の器が存在する。本稿では、この十字紋の装いに看取されるギリシャ趣味及び騎馬文化の要素を手掛かりとして、この十字紋と元朝期の江南地方に駐屯した色目系騎馬軍団、なかんずくキリスト教徒勢力として名を馳せたアラン（阿速）衛都兵団、との関係について考証する。

## An Inquiry into the Image of a Christian Cross on a Seika Plate

Atsushi Uema

## ABSTRACT

A number of excavated items from the site of Nakijin Castle clearly reveal that the ruling clan occupying the castle prior to the advent of a unified kingdom in Okinawa consisted of a highly sophisticated militant group of men of foreign origin. Among the excavated items relating to life, religion, military equipment, entertainment, ornament and so forth which suggest their distinct connection with the Yuan period, there exists the image of a Christian cross drawn on a piece of porcelain. This paper traces its origin and background from the stand point of an equestrian people of Iranian stock called As who were Christians and played a significant military role as well in southern China throughout the Yuan Era.

## はじめに



14世紀の中葉以降から15世紀の初頭にかけて然る武装集団が根城とした今帰仁城の郭内から、十字紋をあしらった元代の青花と呼ばれる陶磁器が出土している。上に紹介した写真資料はその写しである<sup>1</sup>。これを見れば分かるように、この器の内底には、縦軸と横軸が同じ長さにそろえられた十字紋が描かれている。またこの十字紋の中心軸には、もう一つの十字紋が配され、それは然る草花を模してあしらわれている。この十字図柄は明らかにキリスト教との関わりを示すものであると考えられるが、そもそも十字架を形作るにあたり、それぞれの軸をすべて同じ長さにそろえる様式上の伝統（因みにローマ・カトリックの十字架は縦長を旨とする）といったものは、元来ギリシャ正教の影響が及んだ地域において尊ばれて来たものである。面白いことに、この十字紋の中心軸にあしらわれたもう一つの十字意匠にもギリシャ文化との繋がりを髣髴とさせる装いが見て取れる。それをよく観察してみると、十字に配された基軸部の四葉からはそれぞれに一条の細い茎が伸び、さらにその先端には細やかな花卉が折り重なる花冠が描かれている。これら三つの要素、すなわち①四つ葉、②一条の細い茎、③その先端に花開いた小さな花冠といったものの存在は、そこにあしらわれている十字紋が四葉のクローバーをモチーフにして描かれたものであることを示唆する。クローバーに関して少しく付言するならば、バルカン半島及びその東方に隣接するアナトリア地方においては、つとにクローバーを豊穡の象徴として崇める宗教が行われた。この種の古代宗教に由来する信心の類は、今日でもヨーロッパを始め、広く世界の各地にその命脈を保っている。かたや植物学もギリシャ世界とクローバーとの霊妙な関係を説く。それによれば、元来クローバーは、前出のバルカン半島やアナトリア地方を原産地とする野草である。日本ではクローバーをくうまごやし<sup>2</sup>などと呼び習わしているが、古来ユーラシア大陸の騎馬遊牧社会において馬の飼育に不可欠とされたシロツメクサすなわちクローバーが、西域（今日のウズベキスタンのあたりを指す）から東アジアの漢土に移植されることになるのは、かつて名馬の確保に執念を燃やした後漢の時代に遡る出来事である。

ところで元王朝は、13世紀の後半期に同王朝に仕えて南宋攻略に功績のあった西域及び中央アジア出自の騎馬部族を平定後の江南地方に留め置き、彼の地の経営に乗り出す。かかる軍勢の中核には、元来西方のカフカズ山系を故地としたイラン系民族のアラン（阿速）族などが名を連ねた。彼らはトルコ系種族のキプチャク族と同様に、武門の徒として、最後まで元室に忠誠を尽くした民として知られる。中でもアラン族は、元朝治下の漢土において、先祖伝来のギリシャ正教を奉った軍閥として名を馳せた存在であった。上に指摘した花紋・草花十字紋に

看取されるギリシャ的趣向ならびに騎馬文化の要素は、元朝治下の杭州近郊において彼の地の治安維持に奔走したアラン（阿速）衛都兵团との関わりを示唆する。以下にかかる視点から、表題に掲げた十字紋の氏素性について考えてみる。

### （I）モンゴル・ウルスとキリスト教

西欧のキリスト教社会がモンゴル・ウルスの動向に畏怖の念を抱き始めるのは、皇帝オゴデイ（在位1229～41）が1230年代の末期に敢行した西域親征に呼応して、バトゥ（チンギス・カンの長子ジュチの息子）配下のキプチャク人などからなる精鋭部隊が、遙か西方のボヘミアやポーランドのあたりにまで軍事侵攻を行ったことに端を発する。ただならぬ事態に見舞われたヨーロッパのキリスト教社会は、急遽その対策に迫られるが、当初は皇帝フェデリッコ二世（1220年に神聖ローマ皇帝に即位）と教皇グレゴリオ九世（在位1227～41）との間に生じた軋轢が足かせとなり、ヨーロッパ各地の封建勢力が一枚岩となって防衛網を張り巡らすまでにはいたらない。かかる不穏な状況を危惧してその対策に乗り出すのがグレゴリオ九世の後継者として登場する教皇イノセント四世（在位1243～54）である。新教皇は迫り来る危機を回避する方策として、手始めにドミニコ修道会とフランシスコ修道会から医療に従事する布教僧を募り、北東ヨーロッパならびに西アジア各地の異教徒の世界へ送り込む。フランシスコ修道会は、教皇庁のかかる布教方針に則り、当時ガザリア（本来はハザール人の国の意）の呼称で知られていたクリミア半島の一角に伝道の拠点を設け、独自に布教活動を展開する。クリミア半島は、かつてその北方に連なるアゾフ海の豊かな海産物を介して、古代ギリシャの都市国家とも縁薄からぬ関係にあった土地柄であるが、13世紀の中葉には、ジェノバ、ベネチア、ピサ出身の商人たちが、この地を経由してキエフ（現ウクライナ共和国の首都）のあたりにまで交易を目的として進出していた。かのマルコ・ポーロの父ニコロなども、当初はかかる交易ルートで商いに従事した冒険商人であった。従って、当時ガザリアを拠点に活動したフランシスコ修道会の僧侶たちは、カトリックの教えを広める宣教活動に専念する傍ら、一方では前出のイタリア商人たちを精神的に薫陶する存在でもあった。13世紀の中葉にフランシスコ修道会が他の修道会に先んじて南ロシアのジュチ・ウルスやその東方に連なる中央アジア一帯の地理や文物に造詣を深めることとなったのは、この修道会が教皇庁の布教方針に沿って早くからガザリアの周辺地域で宣教活動に従事していたことによるものであった。

ひるがえって、バトゥ、バイダル、カダン、スベテイなどに率いられたアジア系遊牧民の騎馬軍団は、1341年を迎える頃には、ヨーロッパの奥深くにまで攻め入る。ところが明けて1342年を迎えると、剽悍さを売り物とした遊牧民の軍勢は、あたかも引き潮のごとくコーカサス方面へ取って返す。この退却劇はまさしくオゴデイ崩御の落とし子そのものであった。皇帝が死去した折りのモンゴル・ウルスでは、臣民は下々に至るまで遍く皇帝の死を悼む喪に服することが求められた。西方のジュチ・ウルスを率いたバトゥといえども、皇帝の死去に伴うこの慣行には従わざるを得なかった。オゴデイが世を去ったことにより、アジアの遊牧民が東ヨーロッパで展開した軍事行動は、途中で雲散霧消することとなった。

さて、東方のモンゴル・ウルスがオゴデイの崩御に伴い、世継ぎの問題をめぐって不安定な内政状態に陥っていた頃、西方のヨーロッパでは、即位したばかりの教皇イノセント四世が、モンゴル皇帝に宛てて親書をしたためる。教皇は、フランシスコ修道会から二人の僧侶を抜擢

して親善使に任命し、それぞれに自らの親書を託してモンゴル・ウルスへ差し向ける。この大役を仰せ付かるのが、以下に少しく紹介する、カルピニとルブルクである。重大かつ命がけの任務を拝命した両人は、以後それぞれに自らの信心、知識、人脈、縁故などを駆使してモンゴル・ウルスの本陣へ旅立つ。カルピニは1245年の復活祭の日にフランスのリヨンを発ち、一路北東ヨーロッパの内陸部を経て東方へ向かう。途中あまたの災難に見舞われながらも、ついにはカラコルム北方に陣を張る皇帝グユク（在位1246～48）のお膝元に到着する。カルピニには、皇帝の宿営地内に滞在用のゲルが宛がわれる。しばしの逗留を経てグユクとの謁見に臨んだカルピニは、居並ぶ寵臣を介して、カトリックの教えに帰依することを論じた教皇の親書を奉呈する。役目を果たし終えたカルピニは、2年後の1247年の秋にはリヨンに戻る。その後のカルピニは、旅先での体験や見聞を報告書にまとめて任務を終える<sup>2</sup>。

一方、ルブルクが同様の任務を拝命するのは1253年のことである。彼は旅を立案するにあたり、前任者カルピニの経験や見識を参考にはしたものの、それらを安易になぞるようなことはしなかった。ルブルクはアジア内陸部への旅に先立ち、しばらくコンスタンチノーブルに逗留し、彼の地でアルメニア人の聖職者や商人たちと接触を図り、モンゴル・ウルスに関する諸々の情報を収集する。その間、折を見ては小アジアやエジプトへも足を運び、アラビア語とモンゴル語の習得に励む。また彼は机上の文献資料にも注意を払い、必要とされたあらゆる知識の獲得に努めた。ルブルクが旅立ちに当たりあらかじめ身に付けていたとされる黒海周辺ならびに中央アジア一帯の地理や文物に関する知識は、彼が日頃から座右の書とした聖イシドーロ（7世紀にセビリアの大司教を務めたスペインの碩学、560?～636）の著作に負うものであった。かかる周到な準備を経てルブルクは、先に述べたガザリアを経由してカラコルム近郊に陣を張る皇帝モンケ（在位1251～59）の本陣を目指す。ルブルクも旅にあっては筆舌に尽くしがたい困難と危険に遭遇するが、コーカサス平原にさしかかるあたりからはサルタク（バトゥの息子）が差し向けた案内人を立てて東進し、いくつものジャムチ（駅伝）を乗り継いでモンケの宿営地に到達する。モンケに親書を奉呈し終えたルブルクは、帰途に際し、カルピニが辿った北方ルートを避け、自らは南回りのコースを辿る。彼は先ず西進してコーカサス平原へ向かい、そこにさしかかるあたりで南へ折れ、一路アラン族の住むカフカズ山系の丘陵地帯を右手に見ながらカスピ海の西岸部をイラン方面に向かって南下する。その後は彼の地下都市の存在で知られるカッパドキアなどを経てヨーロッパに戻る。ルブルクも帰還後には、自らの旅について記した報告書を作成するが、理不尽にもそれは久しく闇に葬られてしまう。その原因は、時の封建貴族と聖職者との仲違いにあったとされている。その一方で、ルブルクと同時代を生きた英国のフランシスコ修道会士ロジャー・ペーコンがルブルクの著作に造詣を深めていたことは、後にルブルクの名誉の回復に役立った。ルブルクの見聞録は、13世紀中葉の中央アジアに関する情報にすこぶる詳しく、その内容は今もって読者をひきつけて止まない魅力に満ちている。この時代の中央アジアに言及する文献資料の中で、ペルシャ語やアラビア語で記された文献を除けば、質・量ともにルブルクの見聞録を凌駕するものは他に存在しないのではなからうか<sup>3</sup>。

ルブルクが旅に先立ち、念入りに収集したロシア南部ならびに中央アジア一帯の地理及び気候風土に関する情報は、後に彼がその地域を実際に踏破したことにより、それぞれについての正否が確認されることになる。例えば、ドン川とボルガ川は、各々が独自の水系を有する川で

あり、また中世の西洋人が海だと見なしていたカスピ海は、実際には海ではなく湖であるといったことなどが、ルブルクによって西洋に伝えられる。さらにルブルクは言語にも深い関心を示し、多くの言語学上の発見を成している。13世紀の中葉に黒海の西辺・北辺ならびにクリミア半島一帯に雑居した多様な種族集団の内、コマン族はトルコ系種族のキプチャク人と親縁関係にあり、同様の関係はカングル人やトルコ人ならびにウイグル人などにも認められること、一方タタル人とモンゴル人は本来異なる言語集団に属するが、バシキル人の言語とハンガリア人のそれは共通の祖語から派生しており、ロシア語・ポーランド語・ボヘミア語・スラブ語などはバンダル語と親縁関係にあるとする言語学上の見識は、そのいずれもがルブルクの発見に負うものである。加えてルブルクは、当時中央アジア一帯で行われていた種々の宗教や人々の風俗・習慣などといったものにも鋭い観察眼をもって臨み、それらについて実に事細かに書き記している。中でも彼が、当時中央アジア一帯で広く行われていたネストゥリウス派のキリスト教について述べているくだりは、カトリックの教えが東方に伝わる以前の彼の地におけるキリスト教の実態を詳らかに伝えるものであり、その学術的価値は比類なきものに数えられよう。ルブルクによれば、13世紀の中葉に中央アジア一帯で広く行われていたキリスト教（主としてアルメニア教会及びネストゥリウス教会を指す）なるものは、イエス・キリストの名を唱え、胸元で十字を切り、定められた日に断食を行うといった、極めて単純化された教えと服務規程に終始するものであった。さらにルブルクは、彼の地のネストゥリウス教団の奇異な伝統に言及して、男子の信徒には誰彼となく司祭になる地位が保証されている、とも述べている。さらにルブルクの記述は、俗信とキリスト教が混在一体化した特殊な風俗についても触れていて興味を喚起する。当時中央アジアのキルギス人やトルコ系種族の間では、手の甲や額の中央部に卍の刺青を施すといったことなどが行われていたようである。またキルギス族の女性たちには、首筋のうなじに卍の刺青を入れた者も散見されたという。それは、悪霊や疫病から身を守るための呪いの類であったとされる。この種の風習が、古来ユーラシア大陸の騎馬遊牧民に広く流布した卍紋を崇める信仰（卍紋には悪霊を払いのける力が宿ると信じられていた）に根ざしたものであったことは間違いなからう<sup>4</sup>。ちなみに手の甲に卍紋を刺青するなどという風習は、かつて琉球諸島の宮古島あたりでも行われたものであり、いずれかかる風習については、文化人類学の視点なども踏まえた比較考証がなされることを期待したい。

## （Ⅱ）モンテ・コルビノと元朝

13世紀の後半期を迎えると、アヴィニヨンの教皇庁は、一人のフランシスコ修道会士を東アジアの元朝へ派遣する。その人物とは、後にアランの近衛兵団（元朝に仕えた色目系騎馬軍団の一つ）とも親交を深めることとなるモンテ・コルビノ、その人である。モンテ・コルビノは、ハン・バーリク（現北京）に到着後ただちに布教活動を開始し、ほどなくしてオングト部の中に多くの改宗者を得る。元朝における布教活動に確かな手ごたえを得たモンテ・コルビノは、折を見てその事を報告書にしたためてアヴィニオンへ送付する。書簡はガザリアを経由して、先ずフランシスコ修道会の総監ヨハネス・デ・ムーロの元へ回送された。モンテ・コルビノの書簡をアジアから携えて来た人物は、トマス・デ・トレンティーノと名乗るフランシスコ修道会士であった。後にトレンティーノはインドで殉教するが、その亡骸はザイトゥーン（泉州）に移送され、埋葬された<sup>5</sup>。元朝下で自分の身に起こった出来事やカトリックに帰依した

信徒集団について詳述したモンテ・コルビノの書簡は、西欧の聖職者たちに驚きと賛辞を持って迎えられた<sup>6</sup>。かくしてモンテ・コルビノは、元朝のおおらかな宗教政策にも支えられ、王朝のお膝元にカトリックという宗教の種を播いて半生を送る。モールによれば、モンテ・コルビノは、1246年か1247年のいずれかの年に産声を上げたと言われ、生誕地はイタリアのアブリア近郊にあるモンテ・コルビノ (Monte Corvino) が有力視されている。彼は元室のお膝元で24年に及ぶ布教活動に身を捧げた後、1328年にハン・パーリク (トルコ語で王の都の意) で永眠する。享年81歳または82歳であった。ところでモンテ・コルビノは、つとに聖職者の道のみを歩んだ人ではなかった。彼の前半生の履歴には、兵士や教師ならびに裁判官といった職業に従事した経歴も見えている。教師時代の彼は、前出の神聖ローマ皇帝フェデリコ二世の宮廷に召されて御前進講を行ったことでも知られる。学術界においてもモンテ・コルビノは並の人ではなかったことの証である。また元朝へ入朝後の彼は、彼の地で新約聖書をモンゴル語に完訳するという偉業も成し遂げている。モンテ・コルビノは、言葉を操る術においても破格の能力に恵まれていたのである<sup>7</sup>。

さてモンテ・コルビノを元朝へ派遣したのは、教皇ニコラス四世 (在位1288～1292) であった。ニコラス四世は、カトリック教会史上初めてフランシスコ修道会から教皇に推挙された聖職者であるが、彼は東方世界と外交関係を結ぶにあたり、モンテ・コルビノの能力を高く評価して任用した。1280年頃、時のフランシスコ修道会の総監イオアンネ・デ・ペルシチェットは、モンテ・コルビノを布教僧として中近東方面へ送り出す。派遣先における彼の働きを詳らかにする手立てはないが、当時彼はイランのイル・カン朝に拠点を置いて宣教活動に従事していたものと推測される。彼が1289年にイル・カン朝のアルグン・カンの親書を携えてヨーロッパに戻った経緯などは、その辺の事情を物語る。アヴィニョンに戻ったモンテ・コルビノは、腰を落ち着ける間もなく、同年の7月には早々とリエチを發ち、再び東方のイランへ向かう。この度のモンテ・コルビノは、イル・カン朝への答礼使ならびに元朝への特使として、教皇ニコラス四世がクビライ・カーン、アルグン・カン、ジャバラハ (シリアのネストゥリウス教団の最高位聖職者) などへ宛てた親書を携えていた。モールが訳出した内容を参照すれば、クビライへ宛てた親書は1289年7月13日に作成され、アルグンとジャバラハへのそれは同年の7月15日に作成されたことが分かる。かかる一連の動きに着目した江上波夫は、モンテ・コルビノが携えて来たアルグン・カンの親書の内容に言及して、それは「(中略) アルグン・カーンの意を体したサウマの勸説によるものであった (中略)」と述べている<sup>8</sup>。上の引用に登場するアルグンは、モンテ・コルビノと直接に交わりのあったアルグン・カンその人であり、後者のサウマは、クビライの命を受けて元朝からイル・カン朝へ赴いたネストゥリウス教団の高位聖職者にあたる人物である。後にサウマは、イル・カン朝を経て西欧へも赴き、時の宗教指導者や有力な封建諸侯を訪ね歩いて元朝の有様を説いて回ることとなる。モンテ・コルビノとサウマが直々に出会いを果たしたか否かは判然としないが、二人の一連の動きから推察するに、両人は仲介者のアルグン・カンを介して、個々の存在を把握していたものと憶測される。ところでアルグン・カンがモンテ・コルビノに託した親書には、元朝のクビライがヨーロッパのラテン世界との交流を大いに望んでいることが記されていた。親書に盛られた上述の内容は、江上が指摘するように、アルグンがサウマの進言を受けて作成させたものであったことは間違いなからう。それはともあれ、13世紀の後半期にイル・カン朝を経由して西欧に伝えられた元朝

に関する諸々の情報は、一人サウマに負うものばかりではなかった。イル・カン朝の都ダブリーズには、同王朝が広くユーラシアや北アフリカの諸地域から招集した知識人らが一堂に会する学術研究の殿堂があった。その地で展開された学術研究の営みは、アッバース朝における「知恵の館」ならびにスペインのアルフォンソ賢王が深く関与した「翻訳者の館」などにおいて展開を見た同様の営みに勝るとも劣らない輝かしいものである。『集史』〈モンゴル史を世界的な彩を添えて語る〉と命名された歴史書はイル・カン朝のダブリーズにおいて編纂された。またこの歴史書を補完する目的で編まれたものには『フランク史』と命名された小編集なども含まれているが、かかる著作物が完成を見るまでには、複数の西欧出身者の献身的な働きが必要であったことは明らかである。イル・カン朝ではつとにカトリックの僧侶たちが活躍したことが知られている。彼らの中からは、学僧としてダブリーズの学術街に居を構え、ヨーロッパの諸相を伝える執筆活動に携わり、彼の地の学術の振興に貢献する者も現れたと推断される。

さて西欧と元朝は、かかる経緯を経て歴史的な出会いを果たすことになるのだが、それに至るまでの一連の動きには、トゥルイの子孫たちが深く関与していることを見逃してはなるまい。トゥルイ家は、モンケ、クビライ、フラグらを輩出した家柄として知られるが、門閥の祖トゥルイは、チンギス・カンの末子として生を受けた人物である。トゥルイは、つとにユーラシア大陸の遊牧民の慣わしであった末子相続の伝統に則り、家督としてチンギスが統率した中核軍団の大半を相続する。しかしながら皇帝の地位は実兄のオゴデイに譲る。若かりし頃のトゥルイは才気みなぎる武将であった。金朝計略の際には、地形の険しい中国の南西部から金朝軍に攻め入るや、矢継ぎ早に相手方の軍勢を打ち破って進軍し、オゴデイの軍事作戦を勝利へと導く。かかる武勲に輝いたトゥルイであったが、上述の侵攻作戦が終息し、アルタイ山系東方の本拠地へ戻る段に至り、病に倒れて悲運の最期を遂げる。トゥルイには、シウルクテニと呼ばれたケレイト族(トルコ系)出身の妻がいた。彼女は、良妻賢母の鏡としてモンゴル人の間にその名を残す。寡婦となったシウルクテニは、オゴデイ家に輿入れすることを回避し、ひたすらモンケ、クビライ、フラグらの後見役に専念する。嫡男のモンケは、長じてモンゴル・ウルスの四代皇帝(在位1251~59)に即位し、次男クビライ(在位1260~94)は漢土に元朝を興し、中東の経営を託された末弟のフラグは、バグダッドのアッバース朝を駆逐するなり、北方のイランにイル・カン朝を創建する。これらの名君を世に送り出したシウルクテニは、仏教のみならず、回教やキリスト教にも造詣を深めた才女であった。彼女は、私財を投じて、サマルカンドにマドラサ(回教徒の子弟を教育する学校)を建設することにも尽力した<sup>9</sup>。モンケ、クビライ、そしてフラグらは、かように慎み深く知性豊かな母シウルクテニの訓育の下で育ったのである。やがてクビライ家とフラグ家は、互いを隔てた空間の障壁を乗り越えて相和し、13世紀後半期のユーラシア大陸に広く西欧社会をも見据えた新たな世界秩序を構築して見せる。彼らを突き動かした動機に思いを馳せる時、その背後には、おのずと才媛シウルクテニの影の存在が見え隠れする。

ひるがえって再度イル・カン朝に向かったモンテ・コルビノは、彼の地で3年に及ぶ逗留生活を経た後の1291年にインドへ向けて旅立つ。インドでは、ボンベイを経由して東岸のマイラプールを目指し、その地に建つ聖トマス教会に投宿して旅の疲れを癒す。一説によれば、彼が乗り合わせた船がボンベイに寄港した際には、元朝からベネチアへ帰国の途上にあったマルコ・ポーロと奇遇の出会いを果たしたとも伝えられるが、事の真偽は定かではない。また一年

余を過ごすこととなった聖トマス教会では、300人に上る求道者に洗礼を授けたといわれている。やがてモンテ・コルビノはインドを旅立つが、彼が最終目的地の元朝に到着するのは1294年のことである。下船地となった港町は、当時蒲一族が一大拠点とした泉州であった。泉州からハン・バーリクへは、陸路で3カ月の旅を要した。かかる最中、クビライは、彼自身が久しく待ち望んだこの遠来の使者の入洛を待たずに世を去る。クビライが他界したのは1294年の2月18日のことであった。結局ニコラス四世がモンテ・コルビノに託した親書は、次期皇帝に即位したテムル（成宗、在位1294～1307）に奉呈された。因みにモンテ・コルビノが南海路を経て元朝に辿り着くことができた経緯については、ペルシャ湾岸の北岸一帯を出自としたペルシャ系回商・蒲一族らの存在を無視しては語れまい。蒲一族は、宋代の頃から江南地方を拠点にして南海路の交易に従事していたことで知られるペルシャ系の回商集団であるが、とりわけ元代には、この門閥の人々が泉州を拠点にして大いに活躍する。クビライが配下の正規軍を投入して南宋の平定に乗り出した際、蒲一族は宋朝に見切りをつけて元側に降る。蒲一族のかかる動向に着目した桑原隲蔵は、「蒲壽庚が宋を捨てて元に帰した事は、宋元の運命消長にかなり大きな影響を及ぼした」<sup>10</sup>、と述べている。引用に登場する蒲壽庚とは、宋代に泉州の財貨を目当てに襲撃して来た海寇勢力を撃退した立役者としても知られる人物である。後に宋室は、蒲壽庚の手腕を高く評価し、彼に堤擧市舶（外国貿易にかかわる商談や交渉を取り扱う役所の長官）の役職を授ける。モンテ・コルビノが、インド・東南アジアを迂回する航路をさしたる支障もなく通行することができたのは、イル・カン朝や元朝の威光もさることながら、これらの王朝下で活躍した蒲一族に代表されるペルシャ系回商らの陰の支えがあったればこそのことであった。

ところでモンテ・コルビノを迎えたハン・バーリク周辺では、にわかには彼を誹謗中傷する風評が巷で囁かれるようになる。一頃の彼は、命をも奪われかねない険悪な状況に追い込まれる。彼に関する事実無根の噂を巷に流したのはネストゥリウス教団であった。やがてモンテ・コルビノを苦境に陥れた嫌疑の数々は、皇帝に仕える宮仕えの者によってその真相が明るみにされ、彼を翻弄した一連の騒動は着落する。モールが訳出した資料には、モンテ・コルビノの失墜を狙った首謀格の面々らが家族もろとも蟄居を命じられ、辺境の地へ追放された経緯が記されている<sup>11</sup>。因みにモンテ・コルビノが教皇庁へ送付した書簡には、かかる一連の事件や出来事も記されていた。元朝から送付された書簡を手にした教皇クレメンテ五世（在位1305～14）は、1307年、モンテ・コルビノをハン・バーリクの大神父に任命し、併せて彼の要請に応じて、フランススコ修道会から7名の僧侶を抜擢して元朝へ差し向ける。これらの僧侶たちの中で実際に元朝に入朝を果たしたのは、アンドレア・ド・ベルジオ、ジェラルド・アルブイユ、ペレグリーノ・ド・カステーロたちの3名であった。1312年、クレメンテ五世はモンテ・コルビノのさらなる要請に答え、新たに5名の修道士たちを元朝へ向かわせるが、彼らのうちの誰一人として元朝に辿り着いた者はいない。新参の僧侶を迎えて展開されたモンテ・コルビノの布教活動は、元朝からの財政的な援助（僧侶たちには元室から布教を支える援助の一環として給金が支払われた）に加え、ペテロ・ド・ルカロンゴ（ダブリーズから元朝までモンテ・コルビノと旅を共にした商人）の支援にも支えられて発展の一途を辿る。ほどなくしてハン・バーリクには、ルカロンゴが寄進した土地に三つの教会が創建される。まもなく彼らの布教活動は江南の地にも及び、元朝期には世界最大級の貿易港と謳われた泉州（中近東系回商の間では、ア



ラビア語でオリーブの木を意味する〈ザイトゥーン〉なる通称で知られていた)には、新たに二つの教会堂が創建される。鐘楼つきの教会堂は、泉州在住のアルメニア婦人の計らいと喜捨によって建設が進められた<sup>12</sup>。新たに誕生した司教区には、前出のジェラルドが初代の司教として赴任する。ところで泉州の教会は、当時蒲一族が一大拠点とした蕃坊の一角にあった。蕃坊とは、漢土における外国人居留地を指す呼称であるが、宋・元期のこの地区では、住民主体の自治権に加え、外国人の特権に配慮した治外法権も認められていた。またこの居留区内には、蕃学と称された学問所(中国の学問に加え、ペルシャ語やアラビア語などの語学も伝授された)が開設され、宋代には、この蕃学を巣立った外国人の子弟の中から科挙の試験に合格する者も現れる。蒲壽庚などは、まさしくかかる人材の一人であったと見なされる。モンテ・コルビノが到着した頃の元朝では、蒲壽庚に代表されるペルシャ系イスラム教徒たちの交易に関する知識や技術が大いに歓迎され、重用された。その結果、元朝下では自由貿易が益々盛況を博し、王朝の財政を大いに潤すこととなる。当時中近東地域と中国を結ぶ交易路の経営は、ペルシャ湾岸を出自とした蒲一族らの得意とする分野であった。かのバスコ・ダ・ガマの航海でさえ、その内実は、イスラム教徒の航海技術に頼らなくてはならなかった一面を覗かせる。ダ・ガマの船には、一行が東アフリカで雇い入れたイブン・マージド(インド洋の航海に熟達したオマーン出身のイスラム教徒)なる航海士が同乗していた<sup>13</sup>。ダ・ガマ一行が、東アフリカからイスラムの航海術(北極星の高度を測定して陸地との距離を把握する技術)に導かれてインドに到達するのは1498年のことである。因みに、モンテ・コルビノは、このダ・ガマのインド到着より204年も先駆けて漢土に降り立っていることを忘れてはなるまい。

### (Ⅲ) アラン騎馬兵団とモンテ・コルビノ

元朝に仕えて中華本土で活躍したアラン騎馬兵団の事蹟に立ち入る前に、あらかじめこの民族の出自と文化の性格について少しく述べておくことにする。そもそもアラン族は、元来コーカサスの大平原で遊牧生活を生業としたイラン系の遊牧民であった。この民族を総称するアランなる呼称は、本来アーリア人を意味する言葉に由来するといわれ、4世紀の後半期に東方から進入してきたフン族に蹂躪される以前の彼らは、自らをアイリヤと呼び、自らの遊牧版図をアイリヤーナと呼び習わしていたと伝えられる。アラン族は、先達者のスキタイ人やサルマタイ人らの騎馬遊牧文化を継承した民族集団であった。コーカサス平原を遊牧版図とした頃のアラン族は、天蓋を施した牛車に家財道具のすべてを積み込み、それに寝泊りしながら、牛や羊を追って生活を営む典型的な遊牧の民であった。彼らは飼育した家畜のミルクや肉を常食としたが、必要に応じて猟犬を解き放って猪狩りを行い、その肉は食用に、骨は道具や装身具に、脂は灯明の燃料などに用いた。バクラクによれば、英国に古くから伝わる狐狩り(近年この歴史ある狩猟方は、動物愛護の精神に反するという理由から、法的に廃止される)などは、歴史を遡れば、かつてローマ軍団に傭兵として仕えたアラン族がヨーロッパに導入した猪狩りの手法に由来するものであるといわれる<sup>14</sup>。アラン族の集団内では、ユーラシア大陸の主たる遊牧民の例に漏れず、一夫多妻制が行われた。部族の長を選出するにあたっては、世襲制によらず、集団の中から統率力の資質に恵まれた人物が選ばれた。彼らは奴隷制度を認めず、彼らに臣従を誓った民は、養子縁組の儀式を経て迎え入れられ、分け隔てのない扱いを受けた。宗教は独特の祖先崇拜に拠り、戦場で勇敢に戦って潔い死を遂げた同胞の靈魂を奉り、それを崇拜した。

一方でアラン族は、戦いの神を奉ることも行った。刀剣はそれの象徴と見なされ、宿営地には刀を地面に突き立てて畏敬の対象とした。アラン族にとっては、馬の存在も格別なものであった。男たちは、幼少の頃から馬の背で過ごすことを常とし、乗馬によらずして地面を歩き回る人々を蔑みかつ忌み嫌った。

かかる文化の特色に彩られたアラン族が、モンゴル・ウルスと直接に対峙することになるのは1230年代の末期のことである。モンゴル・ウルスの二代皇帝に即位したオゴデイは、父チンギスの遺志を継ぎ、版図拡大の一環として、カフカズ山系北辺地域の制圧に乗り出す。バトゥが配下の精鋭部隊を率いてヨーロッパに侵攻したのは、モンゴル・ウルスのこの版図拡大路線に呼応したものであった。カフカズ山系北辺部の丘陵地帯で展開された軍事作戦には、モンケ、グユク、ポリ、カダーンらの軍勢が投入された。1239年、モンケ配下の軍勢が、カフカズ山系の山懐に陣を構えるアラン族と一戦を交える。アラン族は、カスピ海に流れ込むテレク川の河畔に自らが構築したマガス城に陣を敷いてモンゴル軍を迎え撃つ。アラン族の勇猛果敢な抵抗は3カ月半に及ぶが、仕舞いには軍勢に勝るモンケに軍配が上がる<sup>15</sup>。攻防戦の最中にアラン兵士が見せた猛々しい戦いぶりは、モンゴル軍の指揮官に強烈な印象を与えたようである。モンケはカフカズを去るにあたり、アラン王ハン・フー・スー（杭忽思）に対して、臣下の中から1千名を選び出してモンゴル軍に供出することを命じる。王はこの要求を呑み、モンケに1千名のアラン兵士を差し出す。モンゴル軍に仕えた初期のアラン騎馬千人隊は、かかる経緯を経て創設されたものであった。部隊の指揮はアー・ター・チー（阿荅赤、ハン・フー・スーの長子）に託された。モンケのモンゴル本土への帰還に際し、アー・ター・チー配下の千人隊もモンゴル軍に従軍して東方へ移動する。黄鐘識が亡き師の志を継いで編纂した『元史氏族表二』には、モンゴル・ウルスの本拠地に到着したアラン王ハン・フー・スーが、モンゴル王室から金符を授かった経緯が記されている<sup>16</sup>。又同著は、上述の内容に言及した条において、東方へ移動したアラン部隊の総勢に関して「千戸」なる漢字表記を用いて記している。この記述内容は、アラン部隊の東方への移動が兵士だけに限られたものではなかったことを裏付けるものとして注目される。そもそもモンゴル軍団の千人隊に抜擢されたアランの武人たちは、東方への移動に際し、各人が各々の家族を同伴し、必需品の一切を幌つきの牛車に積み込み、命綱の家畜を引き連れて新天地へと向かったのである。その数は単純に見積もっても数千人に上り、よって彼らの集団移動は、さながら小規模の民族移動の様相を呈するものであったと考えられる。モンゴル・ウルスの本陣へ到達した後のアラン部隊は、やがてモンゴル軍の左翼陣営（モンゴルの伝統では北を背にして右を右翼、左を左翼とする）に組み込まれ、漠地の北東部（現山東省）あたりに配置換えとなる<sup>17</sup>。後に彼らは、クビライに仕えた31の色目系兵団の中でも映え抜きの軍閥として、元朝と命運を共にすることになる。因みにモールの記述を参照すれば、元朝末期におけるアラン人の総人口は、非戦闘員の婦女子を含めて、3万人余に達していたことが分かる<sup>18</sup>。

ひるがえってモンゴル軍と一戦を交えた頃のアラン人は、ギリシャの東方正教会の流れを汲むキリスト教に帰依していた。アラン族は、ローマ帝国のコンスタンチヌス帝が、コルドバ出身の司教オシオの説教に導かれてキリスト教に帰依する（西暦323年）以前から、ギリシャ世界とは深い絆で結ばれていた。古代のギリシャ世界とコーカサス一帯のイラン系遊牧民との結びつきは、紀元前期のスキタイの時代（前7世紀～前3世紀）にまで遡るものとされ、両者の

かかる結びつきは、中央アジアの諸民族にギリシャ神話が断片的に伝播する契機ともなった。ビサンチン時代が到来すると、ギリシャ世界ではアラン人（モシュコーワによれば、アラン人が騎馬戦士集団として出現するのは紀元1世紀の後半期以後のことである<sup>19</sup>）が軍事部門において頭角を現す。6世紀の初頭にビサンチン軍を統率したアスパル將軍はアラン人であった<sup>20</sup>。アスパルが東ローマ世界にあってビサンチン軍を率いた間にあっては、5世紀の後半期から約1世紀に渡り北アフリカに存続したヴァンダル・アラン王国も安泰であった。話は本筋に戻り、ルブルクが中央アジアを踏破した13世紀の中葉にあっては、カフカズ山系ならびにその周辺部に住むアラン族は、依然としてギリシャの精神文化の懐にあった。その頃の彼らが、ギリシャ人の聖職者を迎え入れ、ギリシャ文字を用いて自らの言語を記していた事実はそのことを物語る<sup>21</sup>。一方でアラン族は、先達のスキタイ族やサルマタイ族が得意とした騎馬遊牧文化の物づくりの技を継承した民としても知られていた。とりわけ彼らの金属加工技術は、他に追随を許さない高度なものであった。アラン人に引き継がれた騎馬民族に特有の物づくりの技は、彼らの尚武の気質ともあいまって、とりわけ軍装品の生産にその威力を発揮した。かかるアラン文化の特色は、時のモンゴル・ウルスが最も必要としかつその育成を図らねばならないのもであった。既述において、カフカズを後にしたアラン族が、最終的には漢土の山東省の周辺に配置換えになった経緯を述べておいたが、それは当時の山東省一帯が鉄鉱石の産出地であったこととも無縁ではなかった。軍装品に関して若干付言するならば、元来鎖帷子の製作とその着用はサルマタイ人やアラン人に始まるとされている。バクラクによれば、ローマ帝国軍団に新たに創設された騎兵隊及びそれに伴って導入された刀身の細いサーベルや鎖帷子といった軍装備の類は、東方出自のサルマタイやアランの軽騎兵装備に習ったものであったという<sup>22</sup>。時代は遡るが、かつてローマ帝国で一世を風靡したカエサル將軍（前100～前44頃）は、ポリステネス・アランと名づけた愛馬に跨ってローマ軍を率いたとされる。主人を乗せて一日に160キロメートルもの疾走に耐え、しかもそれを7日から8日間に渡って持続することが可能であったとされるアランの名馬は、紀元前期のヨーロッパにおいても知られた存在であった<sup>23</sup>。中国では後漢の時代に、漢軍が名馬を求めて西域へ攻め込んだことがあった。それは汗血馬の名で知られたフェルガーナの驛馬を獲得するのが主たる目的であったといわれている。興味深いことに、鎖帷子が西域から中国へ伝播したのもこの時代に遡るものようである<sup>24</sup>。加えてこの漢王朝の軍事行動は、名馬の獲得（連れ戻った馬は少数に留まった）のみならず、苜蓿（うまごやし）が中華本土に移植される契機ともなった<sup>25</sup>。話は戻り、刀身が細くて反りの浅い太刀や鎖帷子の製作技術に代表されるアラン人の優れた金属加工技術は、13世紀にあっては健在であった。ルブルクの報告にもそれを証左するくだりがある。ルブルクはモンゴル本土からの帰途に際し、カスピ海の西岸部を南進してヨーロッパに戻るが、彼はそのあたりで鎖帷子を纏ったモンゴル兵の一団と遭遇する。その際ルブルクは、騎乗のモンゴル兵からアラン人らがもの作りの技に長けていることやモンゴル兵が身に纏っている鎖帷子はアラン人の手に成るものであるといった事実を告げられる<sup>26</sup>。ウランバートルの国立歴史博物館の収蔵品を紹介した刊行物には、大モンゴル時代のものである鎖帷子が掲載されている<sup>27</sup>。かかる収蔵品は、かつてモンゴル・ウルスに軍装品を供給したアラン人の工房で製作されたものであろうと推察される。

さて漢土に配属されたアランの武人集団は、クビライの登場によって一躍活躍の場を得る。元朝を興して漢土東北部の主となったクビライは、版図の拡大を目指して物資の豊かな江南地

方の併合に乗り出す。いわゆる南宋計略である。南宋への侵攻作戦が終盤に差し掛かる頃に元軍の総指揮官に任ぜられたバヤン（伯顔）は、キプチャクやアランに代表される西域出自の騎馬軍団を前線に配置して南宋に攻め入る。先にオゴデイが敢行した征西の際には、漢人系の兵士たちが前線に配置されて先鋒隊を担った。かかる戦術には、異民族出身兵士らによる前線からの離脱を阻止する狙いがあった。南宋攻めに際しては、前例とは逆に、西域出自の騎馬民族が先鋒隊を担い、前線に赴いた。ところで元朝の正規軍を率いたバヤンは、13世紀にあってすこぶる国際感覚に秀でた逸材であった。バヤンは、血筋の上ではモンゴル人であったが、彼の感性は深くイラン文化の只中で育まれたものであった。バヤンの父ジャグータイ（代々祈禱師を輩出したバーリン部の出身）は、フラグの征西軍に従軍してイランへ向かう。バヤンもその父を追って西方へ渡り、フラグが創建したイル・カン朝で成長する。バヤンは、1260年代の半ばにフラグの使臣として元朝を訪れるが、その際クビライの強い要望を受けて漢土に踏みとどまる決心をする。またバヤンの来朝は、複数のラテン人を元朝に招き入れる契機ともなった。縁あってバヤンとの知遇を得たラテン人とは、ニコロとマテオを名乗るベネチアの商人たちであった。後にニコロは、息子のマルコ・ポーロを伴って再度元朝入りを果たすこととなる。先行研究によれば、ニコロとマテオは、サマルカンドに近いブカラという町でバヤンと偶然に出会ったのだという<sup>28</sup>。イランの文物を始めベルシャ語（宋・元期の東アジアにおける通商語）にも精通していたバヤンは、元朝に仕えた色目系軍団を登用するにあたり類を見ない采配振りを発揮する。『元史氏族表二』には、元朝に仕えて栄達の道を歩んだアラン人士の面々らが、それぞれの家系図に基づいて紹介されている。その中で元室に仕えて江南地方に活躍の場を得るのがエリア・パートゥー・エル（也烈拔都兒）とその子孫たちである<sup>29</sup>。一族の祖エリアは、虎退治の豪胆談でも知られる人物である。伝承によれば、エリアは、襲いかかる虎をやにわにひねり倒し、その舌を驚ぶかみにするや、短刀で応戦して猛獣を仕留めたとされる<sup>30</sup>。真相はともあれ、この武勇談にはアラン族が誇りとした尚武の精神が活写されていて面白い。ところでこの武人を呼ぶパートゥー・エル（前出のバトゥとパートゥーは同根の名前）なるモンゴル風の名前には、ある種の意味合いが込められているようである。その意味をモンゴル語に求めれば、パートゥーは「頑強な」を意味する形容詞に相当し、エルは「男」を意味する名詞にあたるのが判明する。ならば、パートゥー・エルとは「強靱な男」を意味する尊称の類であったと判断されるが、またそれは、取りも直さず上に紹介したエリアの武人像をもの見事に表出するものでもある。平時に実施された元朝軍の軍事訓練では、時に兵士たちが解き放たれた虎を相手に腕試しの戦いを繰り広げることがあった。武人エリアの荒武者ぶりを伝える逸話は、かかる軍事訓練との関わりも指摘されて面白い。ところで武人エリアは、揚州近郊での攻防戦の最中に戦死したと伝えられる<sup>31</sup>。また常州攻めに際しては、アランの先鋒隊の兵士たちが酒を振舞う南宋側の策略にはまり、不意打ちを食らって全滅するという事態が発生する<sup>32</sup>。それに激昂した元朝軍は、常州の町に一斉攻撃を仕掛け、町中の住民を一人残らず惨殺してしまうという手荒なことをやってのける。一族の祖エリアが他界した後も二代目のイエ・スー・タイ・エル（也速歹兒、長男）とユー・ワー・シー（玉哇失、次男）らは、父親の遺志を継いで元朝軍の先鋒隊に踏みとどまり、南宋の平定のみならず雲南への侵攻作戦にも従軍する。かかるアラン兵団の軍功を称え、南宋の都が陥落する前年の1272年には、クビライの命により新たに左右両翼からなるアラン近衛部隊が創設され、江南と華北にそれぞれ配置さ

れる<sup>33</sup>。アラン人士を中核に据えたこの近衛部隊は元朝が崩壊する寸前まで存続し、元朝と運命を共にする。南宋が平定された後もエリア家とその配下の軍団は治安維持部隊として江南地方に踏み留まり、元朝の国策に大きく寄与する。元朝の樞密院は、エリア家三代目のイー・チャー・リー・タイ（亦乞里歹）ならびに四代目のパイ・チュー（拜住）らを継続して任用し、他の色目系兵団と共に、元朝にとって不可欠な食料供給基地であった浙江方面の治安維持にあたらせる。この辺の事情に着目した江上波夫は、オドリコ・ダ・ポルデノーネの報告に基づき、1320年代の揚州や杭州に有力なキリスト教徒勢力が存在したことを伝えている<sup>34</sup>。上に述べた状況証拠を踏まえれば、江蘇・浙江の両地方に存在したとされるこれらのキリスト教徒勢力なるものが、先祖伝来のギリシャ正教を奉っていたカフカズ出自のエリア家とその配下のアラン近衛兵団であったことは明白である。

さて、モンテ・コルピノが1328年に永眠した後のハン・パーリク周辺では、元室に仕えてアランの近衛師団を統率する地位にあったアラン人の有力者らが、時の元室に対して、モンテ・コルピノの後任を求める要請活動を展開する。彼らはアヴィニョンの教皇庁に宛てて懇請書を作成する。モールは問題の懇請書の内容に言及して、それには1336年の7月11日の日付が記載され、署名欄にはフーティム・ジュエンス、カティセン・トゥング、ゲンボガ・エヴェンジ、ジョハネス・ジュコイと名乗る人物らが名を連ねている、と述べている<sup>35</sup>。モールの研究において、これらのアラン人士は、フーティムが福定（アラン王家五代頭首：知樞密院事すなわち元朝軍統合参謀の一人）に、カティセンが香山（フー・テイ・ライ・ツ一家四代頭首：七代皇帝武宗ならびに八代皇帝仁宗に仕え、衛都指揮使としてアラン左翼近衛部隊を統率）に、ゲンボガが者燕不花（ニエ・クラ家四代頭首：武官の人事や軍隊の訓練ならびに兵馬・軍装備・兵器に関する諸事を司る兵部尚書や財務を扱う大司農丞などの役職を兼務）にそれぞれ比定されている<sup>36</sup>。アラン人士らの要請に応じて十四代皇帝トゴン・テムル（順帝、在位1333～70）は、1336年にフランシスコ修道会の僧侶アンドレアを団長とする総勢15名からなる使節団をアヴィニョンの教皇庁へ派遣する。修好使一行には、前出の者燕不花らの姿もあった。1338年、使節団はアヴィニョンに到着し、教皇ベネディクト十二世（在位1334～42）に謁見する。謁見の儀に同席した者燕不花以下のアラン人士は、モンテ・コルピノの後継者を懇願する旨の要請を行う。ベネディクト十二世は、早速32名からなる答礼使を遣わすことを決定し、元朝からの要請に応えた。使節団の団長には、マリニョーリとファン・デ・フロレンシアという二人の僧侶があたる。一行は1338年に元朝からの使節団に同行してアヴィニョンを発ち、1342年にはハン・パーリクに到着する。宮廷での謁見の儀は同年の8月19日に執り行われ、答礼使はヨーロッパからの献上品に西域産の名馬を添えて順帝に奉呈する。一行は、ハン・パーリクで3年余を過ごした後、帰還の途につく。帰途に際しては、元室の助言を受け入れ、東南アジアを迂回して中近東方面へ向かう南海路を選択する。一行が乗船した泉州では、出発に先立ち、当地のカトリック教会の鐘楼に吊るされていた大小二つの鐘にそれぞれ名前（前者にはアントニーナ、後者にはジョアニーナと命名）を授けて中華の地を後にした<sup>37</sup>。尚、元室は答礼使たちの帰還に際し、国庫から旅の路銀として相応の金品を一行に提供した。元室の懐の深さと気風のよさが印象に残る。因みに、泉州港を船出した答礼使一行は、1353年にはアヴィニョンに帰着している。

## (Ⅳ) 西域出自の色目系駐屯部隊と反元勢力

モンテ・コルビノの後任人事をめぐって展開された既述の外交交渉が展開を見る中、元朝の食料供給基地として重要な役割を担っていた浙江周辺では、後に元朝の屋台骨を崩壊へと導く反元勢力の台頭を見る。元朝政府は、みずからの権益を保護し擁護する方策として、江蘇・浙江の両一帯に西域の諸地域から召集した最強の騎馬軍団を配置する。その規模について、中国の歴代官制制度を研究した和田清は、「(中略) これを見るとき三十七翼の中三十一翼迄が揚子江沿岸に配置せられたのであり、殊に江淮のデルタ地帯には二十翼の萬戸府が集中せられ、また北支那の大都より、杭州、平江(蘇州)、慶元(寧波)を結ぶ元朝の経済的大動脈の線に沿って兵力の多い上萬戸府が配置せられてゐたことを知りうるであろう。即ち江淮地帯とこの経済的大動脈が元朝では軍事的に重要視され特に強大な軍備がなされてゐたのである」<sup>38</sup>、と述べている。元末に江南沿岸一帯の海寇の民を東ねた方国珍、江蘇の塩徒の衆を率いた張士誠、紅巾の勢力を巧みに操った朱元璋(明朝を興して洪武帝を名乗る)らは、これらの色目系駐屯部隊を相手に武力闘争を展開した。上述の漢人系領袖たちの中で、エリア家の四代頭首パイ・チューと直接に刃を交えたのが方国珍及び張士誠配下の勢力であった。なお方国珍は、14世紀の前半期に配下の勢力を率いて浙江東端地域の台州、慶元、温州一帯を支配下に置き、そこに元朝とは一線を画す独自の政権を樹立したことで知られる。方国珍とその勢力について研究した寺地遵は自著の論文に、この勢力と対峙した26名に及ぶ元側の武将や守臣らについて、実名を掲げて紹介している<sup>39</sup>。これらの人名中、華人系の名前であると見なされるものはわずかに7つで、それ以外はすべて異民族の名前がずらりと並ぶ。前者の華人系と判断される人物らは恐らく華北人であったろう。元朝治下の中国では、華北人は江南人とは別格に扱われ、前者には元朝に官僚として仕える道も開かれていた。一方、漢人といえども江南人に対しては、官僚に仕官する道は閉ざされていた。モンゴル人の江南人に対するこのような徹底した被差別的態度は、元末の江南地方に排外主義を唱える勢力の台頭を生み、やがてはそれが元朝の屋台骨を根底から揺さぶることとなる。15世紀の中葉に編まれた『歸田詩話』なる詩撰集には、元末期の色目系人の動向を詠んだ一篇の詩が採録されている<sup>40</sup>。脚注に紹介したその内容を見れば、浙江東端部を支配下に収めた方国珍の勢力がいかに色目系人を忌み嫌っていたかが分かる。ところで先に言及した寺地の人名リストのしんがりには、「拜住哥」と名乗る元側の守将が登場する。この人物の存在は、本旨との関わりにおいて、重要な意味を持つ。方国珍が傘下の勢力を率いて元側の色目系軍団を相手に臨戦態勢にあった頃、エリア家の四代頭首拜住は配下の阿速(アラン)衛千人隊を率いて浙江地方の治安維持に奔走していた。考察に付した諸事に基づけば、寺地の人名リストに記されたこの「拜住哥」なる守将と方国珍や張士誠らを相手にアランの近衛兵団を率いて奮戦したエリア家四代頭首の「拜住」は同一人物であったと見なされる。そもそも「拜住」なる呼称は明らかにモンゴル系の人名なのであるが、面白いことに、この人名の後尾に現れる哥なる語は、中国語で義兄弟の義に用いる言葉である<sup>41</sup>。中国語におけるこの言葉の用例を踏まえれば、当時拜住は、部下の兵士たちから尊崇と敬愛の意を込めて「パイ・チュー兄様」と呼び慕われていたものと解釈される。ところで先に触れた和田の論文を参照すれば、浙江地方を含む長江のデルタ地帯に配置された色目系軍団の兵力については、単純に見積もっても14万人に上る規模を誇るものであったことが判明する。往時に拜住が率いたアラン部隊もかかる駐屯部隊の一翼を担っていたわけである。

さてかかる兵力を誇った守備隊も、14世紀の前半期に至っては、反元諸勢力と対峙して敗退に追い込まれる。杭州近郊を守備範囲としたアランの守備隊も同様の運命を辿ったわけであるが、残念ながらこの軍団のその後の顛末を詳細に伝える文献資料の存在は知られていない。桑原隲蔵の研究には、元朝崩壊後の華北及び華南において虐殺されたアラン人のことが見えている<sup>42</sup>。しかしながらそれとでも、その内容はほんの一行にも満たない断片的なものに過ぎない。文献資料をめぐるこのような状況にあって、先に『歸田詩話』を引いて紹介した逃避劇のあらましは、守備隊壊滅後の色目系人の動向の一端を今に伝えるものとしてすこぶる注目される。それには、方氏勢力の台頭に伴い、浙江地方から東方の海原の彼方へ逃避した然る色目系人のことが詠まれている<sup>43</sup>。この逃避劇が伝える内容は、今帰仁城跡で発掘された元朝期の出土物との関わりにおいて、意味深長な内容を孕んでいる。一体14世紀中葉から15世紀初頭にかけて今帰仁城を拠点に周辺域を支配した武装勢力は、不思議なことに十字の形状に格別の思いを寄せる人々であったことが種々の出土史料から読み取れる。この勢力と十字図柄との関係は、冒頭に紹介した十字紋の他に、異色の凸型スタンプ状マンジ紋（卍紋がユーラシア大陸の騎馬遊牧民に崇拝されたことについては先に言及した）、豹紋碗に施された十字紋（因みに陶器に豹紋をあしらう芸術的趣向はイランに始まり、その歴史は紀元前の4千年紀に遡る<sup>44</sup>）、後期今帰仁勢力の領袖・攀安知の所有物であったと伝えられる刀剣千代金丸（後世の命名）の鐔に透かし彫りにされた四葉のクローバーを模した十字紋（その傍らにはクローバーの花紋及び猪目紋が確認される）、『中山世譜』が伝える攀安知最後の行状<sup>45</sup>などといったものに及ぶ。またこの勢力との関わりを示す発掘遺物には、食糧残滓としての麦の炭化粒、左回転式の携行用石臼（小型であることから騎馬遊牧文化との繋がりが指摘される）、騎馬民族の軍装備との関係が指摘されるへら型の扁平鏃<sup>46</sup>、流線形骨製ヤジリ（ヤジリの素材を動物の骨に求める伝統は遊牧文化に特有のもの<sup>47</sup>）、片端に小さな穴が穿たれた短冊状の携帯用石製ヤスリ（内モンゴル地方からも類似のものが出土している。モンゴル軍団の騎馬武者が常時携行しなければならなかった装備品の一つ<sup>48</sup>）、鉄製の小刀類（つとに西域出自の騎馬戦士は名うての短刀使いであったことで知られる。虎と格闘したパートゥ・エルを参照）、虎の牙（細工を試みたと見られる鋭利な切込み痕を残す）、武人たちがナルドの遊びに興じていたことを窺わせるサイコロと小円形の石駒（イラン起源のこの陣取り遊びは中国に伝播して双六と命名される。考案者はササーン朝のホスロー一世<在位531～579>に侍医として仕えたブズルグミフルであるとする説が有力<sup>49</sup>）、長方形の薄い鉄板（無数にしかも整然と小さな穴がくり貫かれている。その正体は甲冑に縫い付けた防護板であったと見なされる。「文永の役」の際、博多近郊で戦死したモンゴル兵の防護服にも類似の鉄板が縫い付けられていた<sup>50</sup>）、青磁碗や青花碗に記されたパスパ文字（クビライの命を受けて、チベット仏教の高僧パスパが考案した文字体系。モンテ・コルピノがモンゴル語に翻訳した新訳聖書はこの文字で記されていた可能性が高い<sup>51</sup>）、精巧な出来栄を誇る現代風ハサミ（類似のハサミはウランバートルの国立歴史博物館の収蔵品にも見られる）、などといったものがある。これらの品々は、そのいずれもが元朝期の文化的状況や西域出自の騎馬文化との繋がりを色濃く反映する。因みに騎馬文化といえば、今帰仁城跡から出土した青花碗には、その胴面にキルギス族の騎馬武者の像をあしらったものや<sup>52</sup>、アラン族の守護神像（四足獣の背に二股に分かれた羽らしき突起物を持つのが特徴）を髣髴とさせる飛走馬をあしらったものなどもある<sup>53</sup>。かかる出土物の存在は、14世紀前

半期の終わり頃から15世紀の初頭にかけて今帰仁城を根城とした武装勢力が、元末に方国珍や張士誠らの勢力によって浙江地方から排除された色目系騎馬軍団を出自に持つ人々であったことを立証するものになると判断される。このたびの論考を通して、問題の青花皿に配された十字紋には、ギリシャ文化と騎馬文化の融合を示す意匠が施されていることを見た。一体元朝期の江南地方にあって、ギリシャ正教を奉り、騎馬軍団を編成して元朝に仕えたキリスト教徒勢力といえ、アラン（阿速）衛都兵団を除いては他に類を見ない。かかる状況証拠や本稿の第三項において詳しく考察したアラン騎馬千人隊の来歴をめぐる諸事を鑑みると、問題の青花皿に描かれた十字図柄の正体は、元室に仕えて江南地方で武勇を馳せたキリスト教徒勢力、すなわちエリア家及びその配下のアラン騎馬衛都兵団にゆかりの十字架紋に相違ないものと解釈される。

## おわりに

元朝を打倒して漢民族の王朝を樹立した朱元璋は、新たな国造りを進めるにあたり、漢土から外国人勢力を極力排除することに腐心した。因って明朝初期の江南地方では、とりわけ前出のイラン系出自の蒲一族らがその煽りを諸に被ることとなった。明朝初期の官警はこの一族の動向に睨みを利かせ、彼らの中から官職への仕官を志す者がおればそれを拒み、また仕官に際してこの一族との関係が疑われた者に対しては、その者の血筋を三代に遡って詮索するほどであった。明朝のかかる攘夷思想に基づく対外・対内政策（明代に琉球王朝の盛衰を左右した海禁政策もその一つであった）は、結果としてこの王朝のキリスト教に対する姿勢にも反映される。漢人を主とした王朝の確立とその久しき安寧を希求した明朝は、先行のモンゴル王朝とは対照的に、西洋伝来のキリスト教を漢土から退ける姿勢を終始貫く。ところが16世紀の中葉以降、異教徒に対する布教の志を御旗に掲げたイエズス修道会が、よりによってかかる明朝体制下の漢土に数多くの布教僧を送り込んで来る。後に利瑪竇の漢名で広く知られることとなるイエズス修道会の僧侶マテオ・リッチ（1582年にマカオに到着。西洋人として始めて漢文による本格的な著述を行い、1610年、北京にて死没）もその一人であった。リッチは、漢文による著述を通して、江戸期の日本の漢学者にも影響を与えたことで知られる、西洋ルネッサンス期の学問に研鑽を積んだ博学の人であった。ところがかかるリッチでさえ、明朝政府から布教の許可を得ることは終生叶わなかった。明朝政府がこのようにキリスト教を禁教にした背景を鑑みれば、このたび考察した十字架紋皿といった類のものを明代の交易の観点から扱うことにはすこぶる差し障りを覚える。因ってこの出土遺物の氏素性をめぐる問題に関しては、やはり中世今帰仁勢力の民族的出自、なかんずく元朝配下のアラン衛都兵団の動向といったもの、と絡めて論考することが肝要であると認識される。



【注釈】

- <sup>1</sup> 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』、今帰仁村教育委員会、1983年、84頁。
- <sup>2</sup> *THE JOURNEY OF FRIAR JOHN OF PIAN DE CARPINE TO THE COURT OF KUYUKU KAHN, 1245-1247, AS NARRATED BY HIMSELF.*
- <sup>3</sup> *THE JOURNEY TO THE EASTERN PARTS OF THE WORLD OF FRIAR WILLIAM OF RUBRUCK OF THE ORDER OF MINOR FRIARS IN THE YEAR OF RACE MCCLIII.*
- <sup>4</sup> 現今の考古学の成果は、この地域で行われた刺青の風習が3000年以上も古い時代に遡るものであることを伝える。*The Bronze Age and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia*. Volume I. Edit. Victor H. Mair. U of Pennsylvania Museum Publications, 1998, p.174.
- <sup>5</sup> A. C. MOUL, *CHRISTIANS IN CHINA BEFORE THE YEAR 1550*, p.182.
- <sup>6</sup> モールは、くだんの経緯について、モンテ・コルビノがラテン語で記した書簡を訳出して詳しく紹介している。Moul, op. cit., pp.171-180.
- <sup>7</sup> Moul, op. cit., p.176.
- <sup>8</sup> 江上波夫、『アジア文化史研究』、東京大学東洋文化研究所、1967年、342頁。
- <sup>9</sup> ドーソン、『モンゴル帝国史2』、佐口透訳注、平凡社、1994年、287頁。
- <sup>10</sup> 桑原隲蔵、「蒲壽庚の事蹟」、『桑原隲蔵全集第五巻』、岩波書店、1968年、169頁。
- <sup>11</sup> Moul, op. cit., p.173.
- <sup>12</sup> Moul, op. cit., p.192.
- <sup>13</sup> 青木康征、『海の道と東西の出会い』、37頁。
- <sup>14</sup> Bernard S. Bachrach, *A History of the Alans in the West*, p.118.
- <sup>15</sup> V. Minorsky, *The Alan Capital Magas and the Mongol Campaigns*, p.226.
- <sup>16</sup> 黄鐘識、『元史氏族表二』、207頁。
- <sup>17</sup> Moul, op. cit., p.263.
- <sup>18</sup> Moul, op. cit., p.253.
- <sup>19</sup> M.G. Moshkova, *The Sarmatians from the River Don to the Ural Mountains*, 『南ロシア騎馬民族の遺宝展 ヘレニズム文明との出会い』、江上波夫・加藤九祚監修、169頁。
- <sup>20</sup> Bachrach, op. cit., p.42. Salvador Claramunt, *Las Claves del Imperio Bizantino 395-1453*, p.11.
- <sup>21</sup> Rubruck, op. cit., p.88.
- <sup>22</sup> Bachrach, op. cit., p.36.
- <sup>23</sup> Bachrach, op. cit., p.16.
- <sup>24</sup> M. Rostovtzeff, *Iranians and Greeks in South Russia*, p.204
- <sup>25</sup> 『新シルクロード1』、NHK新シルクロードプロジェクト編著、112頁。
- <sup>26</sup> Rubruck, op. cit., p.261.
- <sup>27</sup> 『モンゴル歴史博物館』、バトサイハン監修、ムンフザヤ・ボルマ訳、デ・コム社、2000年、21頁。
- <sup>28</sup> マルコ・ポーロ、『東方見聞録1』、愛宕松男訳注、東洋文庫、1994年、10頁。
- <sup>29</sup> 黄鐘識、前掲書、207～210頁。
- <sup>30</sup> Moul, op. cit., p.263.
- <sup>31</sup> Moul, op. cit., p.263.

- <sup>32</sup> マルコ・ポーロ、『東方見聞録2』愛宕松男訳注、東洋文庫、平凡社、1992年、53頁。
- <sup>33</sup> Moul, op. cit., p.261.
- <sup>34</sup> 江上波夫、前掲書、350頁。
- <sup>35</sup> Moul, op. cit., p.252-253.
- <sup>36</sup> Moul, op. cit., p.261-264.
- <sup>37</sup> Moul, op. cit., p.259.
- <sup>38</sup> 和田清、『支那官制發達史（上）』、中華民国法制研究会、1942年、366頁。
- <sup>39</sup> 寺地遵、「方国珍政権の性格」、『廣島史學研究會編』223号、1999年、40頁。
- <sup>40</sup> <（中略）至正末方氏據浙東深忌色目人（中略）>、『歸田詩話』、瞿佑 撰、成化二年（1466年）、18頁。
- <sup>41</sup> 愛宕松男、「朱呉国と張呉国」、『東北帝国大學文化會編輯』、17（6）、通号159、10頁。
- <sup>42</sup> 桑原隲藏、前掲書、239頁。
- <sup>43</sup> <行蹤不異泉東徒>、瞿佑、前掲書、18頁。
- <sup>44</sup> R. Ghirshman, *IRAN*, Penguin, 1965, p.36.
- <sup>45</sup> <揮劍劈石自刎 中略 有十字劈開之跡劍名千代金丸>、蔡温、『中山世譜』、42頁。
- <sup>46</sup> Сартборжигин Жамбын БАЗАРСУРЭН, Олхонуд Хайнзангийн ШАГДАР, *ИХ СУУ ЗАЛИЙН ИВГДАР*, Улаанбаатар, 2003, p.175.
- <sup>47</sup> ドーソン、『モンゴル帝国史1』、佐口透訳注、平凡社、1994年、13頁。
- <sup>48</sup> 増田精一、「佩砥」、『Museum』34号、1954年、26頁。
- <sup>49</sup> 前嶋信次、『世界の歴史8 イスラム世界』、河出書房新社、2001年、48頁。
- <sup>50</sup> 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』、今帰仁村教育委員会、1991年、310頁。
- <sup>51</sup> 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』、今帰仁村教育委員会、1991年、159頁。
- <sup>52</sup> 『今帰仁城跡調査報告Ⅱ』、今帰仁村教育委員会、1991年、214頁。上間篤、「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」『名桜大学紀要』第10・11号、2006年、38頁。
- <sup>53</sup> 『今帰仁城跡調査報告Ⅰ』、今帰仁村教育委員会、1983年、82頁。

## 【引用文献】

- Bachrach, Benard S. *A History of the Alans in the West*. Minneapolis: U of Minesota Press, 1973.
- Сартборжигин Жамбын БАЗАРСУРЭН,  
Олхонуд Хайнзангийн ШАГДАР. *ИХ СУУ ЗАЛИЙН ИВГДАР*. Улаанбаатар:  
СОЁМБО, 2003.
- Claramunt, Salvador. *Las Claves del Imperio Bizantino 395-1453*. Barcelona: Planeta, 1992.
- Ghirshman, R. *Iran*. Maryland: Penguin, 1965.
- Minorsky, V. *The Alan Capital Magas and the Mongol Campaigns. Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. Vol. XIV. London: U of London, 1952.
- Moshkova, M. G. *The Sarmatians from the River Don to the Ural Mountains*. 『南ロシア騎馬民族の遺宝展ヘレニズム文明との出会い』江上波夫・加藤九祚監修 朝日新聞社 1991年
- Moul, A. C. *Christians in China before the Year 1550*. NY: The Macmillan, 1930.
- Rostovzeff, M. *Iranians and Greeks in South Russia*. Oxford: The Clarendon Press, 1922.
- The Journey of Friar John of Pian De Carpine to the Court of Kuyuku Kahn, 1245-1247, as Narrated by*

- Himself*. Trans. William Woodville Rockhill. London: The Hakluyt Society, 1900.
- The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself*.  
Trans. William Woodville Rockhill. London: The Hakluyt Society, 1900.
- The Bronze Age and Early Iron Age Peoples of Eastern Central Asia*. Vol. I. Edit. H. Mair, Victor. Philadelphia:  
U of Pennsylvania Museum Publications, 1998.
- 青木康正 『海の道と東西の出会い』 山川出版社 2000年
- 愛宕松男 『朱呉国と張呉国』『東北帝国大學文化會編輯』17(6) 通号159、1953年
- 上間 篤 『青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る』『名桜大学紀要』第10・11号、2006年
- 江上波夫 『アジア文化史研究』東京大学東洋文化研究所 1967年
- 『歸田詩話』 鞆 佑 撰 1466年(成化二年)
- 桑原隲蔵 『蒲壽庚の事蹟』『桑原隲蔵全集第五卷』岩波書店 1968年
- 蔡 温 『中山世譜』沖縄県教育委員会 1986年
- 『尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』那覇市 2002年
- 『新シルクロード1』NHK新シルクロードプロジェクト編著 日本放送出版協会 2005年
- ドーソン 『モンゴル帝国史2』佐口透訳注 平凡社 1994年
- 寺地 遵 『方国珍政権の性格』『廣島史學研究會編』223号 1999年
- 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年
- 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991年
- 黄 鐘識 『元史氏族表二』1801年
- 前嶋信次 『世界の歴史8 イスラム世界』河出書房新社 2001年
- 増田精一 『佩砥』『Museum』34号 1954年
- マルコ・ポーロ 『東方見聞録1』愛宕松男訳注 東洋文庫 1994年
- マルコ・ポーロ 『東方見聞録2』愛宕松男訳注 東洋文庫 1992年
- 『モンゴル歴史博物館』バトサイハン監修 ムンフザヤ・ボルマ訳 デ・コム社 2000年
- 和田 清 『支那官制發達史(上)』中華民国法制研究会 1942年

### 【引用文献以外の参考書目】

- Álvarez Pena, Alberto. *Simbología mágico-tradicional*. Gijón:Piccu Urrielu, 2002.
- 奥崎裕司 『元末方国珍の乱前史』『茅茨』3号 青山学院大学東洋史会 1987年
- 平川祐弘 『マッテオ・リッチ伝1』東洋文庫 1997年
- 平川祐弘 『マッテオ・リッチ伝2』東洋文庫 2004年
- 平川祐弘 『マッテオ・リッチ伝3』東洋文庫 2004年
- 増田精一 『石臼の出現と漢代の東西文化交流』『Museum』93号 1958年